平成十八年度読書感想文コンクール作品集

もさく

大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教員図書部会

目　次

講評・その他　一般科目　国語科教員　相本　正吾　2

入選　第一位　『生老病死を支える』を読んで　都市システム工学科　二年　橋本　健　3

入選　第二位　『ガンジー』を読んで　制御情報工学科　一年　河野　史織　4

入選　第三位　『銀河鉄道の夜』を読んで　都市システム工学科　三年　浦竹美優紀　4

佳　作　『イラクの小さな橋を渡って』を読んで　電気電子工学科　一年　朝来　貴宏　5

〃　『亡国のイージス』を読んで　電気電子工学科　一年　河村　貴裕　6

〃　『解夏』を読んで　電気電子工学科　一年　藤下　広夢　7

〃　『ガンに生かされて』を読んで　制御情報工学科　一年　山口　友翔　7

〃　『最後の言葉』を読んで　都市システム工学科　一年　佐藤　未都　8

〃　『地獄変』を読んで　電気電子工学科　三年　藤津　直紀　9

〃　『アルジャーノンに花束を』を読んで　都市システム工学科　三年　首藤　法子　9

編集後記　学生図書委員長　松下　容子
（電気電子工学科　五年）

校内読書感想文コンクール（平成十八年度）

講評・その他

一般科目　国語科教員
相本正吾

本年度は、担当国語教員により各クラスから選ばれた優秀作及び自主投稿の作品（今回は原稿用紙三枚以内という形を基本としました）を対象にして、教員図書部会委員及び学生図書委員による第一次・第二次審査、国語教員による厳正なる第三次審査を経て、「入選作」として三作（第一位～第三位）、「佳作」として七作が選出されました。

栄えある第一位に輝いた橋本君の「『生老病死を考える』を読んで」は、同居していた祖母を病院での治療の末亡くした橋本君自身の体験も踏まえ、医療に携わったことのある筆者方波見さんの意見を引きつつ、医療の現場に見られる患者の生老病死の苦しみという重い現実と医療現場の諸問題について考察していて、読みごたえがありました。

第二位の河野君の「『ガンジー』を読んで」は、意見の食い違いからよく喧嘩をしていて時に暴力を使うこともあった小さい頃の自分のことを省みつつ、暴力を排し愛と勇気を持って貧しい弱者の立場に立って行動しようとしたガンジーの行動の理念への共感を述べています。

第三位の浦竹さんの「『銀河鉄道の夜』を読んで」は、宮沢賢治の名作『銀河鉄道の夜』に展開される光景及び主人公に見られる自己犠牲の精神という心の美しさに触れて、自分の心が大きく暖かくなれたという貴重な読書体験を述べています。浦竹さんが添えた、その美しさは「哀しみ」を湛えたものだという見方には、深い洞察がうかがえました。

佳作となった七つの作品も、内容や表現において入選作に勝るとも劣らない力作が揃いました。イラクの戦禍の現実を知らされて平和の大切さと他の国の世界のことを知っていくことの必要を述べた朝来君の作品、日本の防衛体制と愛国心のことに強い関心を向けている河村君の作品、失明するとしたら最後に見たいものは何かという問いかけを通して家族や近親者の有り難さのことを考えた藤下君の作品、ガンの宣告を受けながら笑顔のうちに生きこの世を去った主人公の生き様に思いをはせた山口君の作品、歌手川嶋あいさんの生い立ちと歌手活動に触れて家族との絆や夢を追う素晴らしさのことを述べた佐藤さんの作品、わが娘をも犠牲にする芸術至上主義の結果、大事な何かを見失っていた主人公の愚かな悲劇を指摘した藤津君の作品、手術によって高い知能を得た主人公にもたらされた困惑を通して人間の良し悪しとは何なのかについて鋭く考察した首藤さんの作品、いずれの作品も、見るべきものがあり、読む私たち側にいろいろと大事なことを考えさせる作品となっています。

校内読書感想文コンクールへ向けて今回提出された各人の読書感想文の内容の傾向として、その本に表れた考えや物の見方をそのまま肯定し、称え、受け入れている作品が多かったように思います。読書の基本は、その本に書かれている情報や考えや物の見方について読者側がよく吟味し考えてみて自分のうちに正しく有意義に消化していくことにあります。その本の内容において、疑わしい情報や偏った考えや精神に対しては、時に懐疑的・批判的に捉えていく姿勢を持つことが大切ではないかと思います。孟子が述べた「尽く書を信ずれば書なきに如かず」という有名な言葉は、読書における批判的な態度の必要さを端的に述べたものであり、そういった読書の態度は、私たちが未来に向けて正しい情報と価値ある健全な考え方や姿勢を獲得していくために欠かせない大事なものでしょう。

次回の校内読書感想文コンクールに向けて目標や志のある学生は、日頃から広い読書と文章作成の研鑽に励んで、入選を目指してもらいたいと思います。

四・五年生の自主投稿も大いに歓迎しているので、次回は上級生の投稿・入選も期待したい。

入選第一位

『生老病死を支える』を読んで

都市システム工学科　二年
橋本　健

「医療は生きる苦しみと悲しみ、病と老いと死の出会うところである。」

医療の姿を著者である方波見康夫さんは、このように書いている。方波見さんは、北海道で四十年にわたり、地域医療に尽力されてきた一人の医師である。本の中では、自らが長年、医療に携わってきた者として、医療と生老病死のあり方について、専門的な立場から意見を述べている。

僕が、この本を読もうと思ったのは今年の夏休みに同居していた祖母を亡くし、生きる、老いる、病む、死ぬといった人間の一生と医療のあり方やそれらの意味について、改めて深く考え、学ぶ機会が与えられたからである。

夏らしい青空が広がった、暑い暑い八月のはじめ、祖母は県立病院のＩＣＵ（集中治療室）のベッドの上で家族と数人の看護師さんに見守られながら、静かに息を引き取った。約一ヶ月に及ぶ治療もむなしく、無数の点滴チューブ、医療機器、様々な救急救命器具があるその場所で祖母は突然、この世を去った。享年七十歳。―死―という辛く、重い現実がそこにはあった。

本の中で、

「死とは一体、何か？」

という問いかけに対し、著者は

「死とは、いつも私たちの身近に姿を潜ませているものである。」

としている。

死を否認する現代社会において、確かに死は常に私たちの日常と隣り合わせであるという著者の意見は正しい。だが、多くの人たちはその事を忘れてしまっている。そして、大切な人の死を経験した場合などに、その事に改めて気づかされる。このように、普段、私たちが死というものを意識出来ていないのはまさに、死を自分の事として捉えきれずにいる証拠である。

更に、著者は医療が果たす役割について、次のように書いている。

「医療とは、死を恐れる患者を支え、癒やし、慰めるものである。だが、医療は発展途上の科学に過ぎず、医療者には控えめな態度が必要である。」

元気だった祖母の予期せぬ入院、病という目には見えないものと必死で闘いながらも、その先に待っていたのは死という結末。この出来事を通して、病にかかれば、頼れるものは病院の先生や看護師さん、投与される薬の効果や新たな治療法といった医療である。だが、それは著者の言うように不完全なものであるに違いない、と気づかされた。

科学技術が高度に発達した今日、医療も日々進歩し、そのおかげでたくさんの人の命が救われている。また、医療の存在が時として私たちの心の精神的な支えになり、癒やし、慰めてくれる事も事実だ。日本においては、医療の普及の影響もあり、医療は私たち一人一人の生活に深く密着し、日常生活から切り離して考える事が出来ない存在となっている。

だが、その反面、新聞やテレビのニュースなどを見ると、手遅れの末期がんや難病やエイズ、様々な障害や高齢化社会の進展に伴う老いや認知症などが存在していて、医療は、こうした数多くの困難な課題を抱えているという厳しい現実があり、また、規制緩和や医療保険制度改革といった医療と私たちを取り巻く急速な環境変化が進んでいる事にも目を向けなくてはならない。

最後に、

「健やかな老いは大切である。だが、老いれば病気も多い。そして、人は全て死ぬ。いずれは避けられない人間としての定めを普段から心がけとし、受け容れておくことは最も大切な生き方である。」

と著者はまとめている。

私たちは、様々な矛盾をはらんだ社会に生き、そのために日々生きていく中で、迷い、物事の本質を見失ってしまう事さえある。また、その物事の本質が本当に正しいかどうかさえ、誰にも分からず、もしかしたら、この

世の中で起きている大半の事が間違いなのかもしれない。医療と生老病死のあり方についてもそうである。双方の最も望ましい関わり方も未だに答えは導き出せずにいて、私たちは、その答えをこれからも探し続けるのだろう。

だが、著者の言うように、遅かれ早かれ、人生の最後には死という結末が待っていて、必然的に、私たちは皆、死というものと向かい合いながら生きている。だからこそ、私たちはその事を十分に理解した上で、生まれてきた事に感謝する必要がある。そうして、一度限りの人生で、様々な事に躓きながらも幸せを求め、自らに与えられた時間の一瞬一瞬を真剣に生きて、自分らしい人生が締めくくれるよう、努力していく事が大切だろう。

入選第二位

『ガンジー』を読んで

制御情報工学科　一年
河野史織

この本に書いてあるのはガンジーという一人の人間の生き方だ。暴力そのものを憎み、弱者も含め万人を愛し、弱者の一員として貧しい生活をして模範となる。その理念は弱者だった人々を中心に共感と希望を与えた。人間の良心に訴えかける力に長けていた。彼ほど愛と強さに溢れる人が他にいただろうか。

僕は小さい頃に、何度も喧嘩をしていた。今となっては恥ずかしい思い出だ。しょっちゅう他人と意見が食い違った。自分の考えを認めてもらいたい一心で口喧嘩を発展させ、仕舞には暴力を使っていた。幼かった僕は大人の説教でも変わらなかった。

その頃の僕にガンジーの理念は理解できたのだろうか。僕はガンジーと全く違う方法を選んでいた。ある時の喧嘩の後、相手を強く恨み、次の喧嘩でコテンパンにしてやろう、などと考えた。しかし、それを境に喧嘩をしなくなっていた。強く恨んでいて、相手に理解されたいという気持ちが失せてしまったのではないかと今になって思う。意見の食い違いに目くじらを立てる事もなく、喧嘩にならなかった。いつしかその意見の食い違いを楽しめるようにさえなっていた。喧嘩の無い日々が好きになった。

今ではガンジーの理念に深く共感できる。もしも今からガンジーが集会や行進を始めるならば、積極的に参加したいと思うことだろう。

ガンジーの考えを理解できなかった人は絶えることがなかったようだ。人間が自分の考えを変える事は確かに難しい。必要なのは経験と知識、きっかけと、そして何より自分の間違いを認められる強い心だと思う。ガンジー自身が強い心を持っていた上、周りの人々に強い心や勇気を与えていた。ガンジーに共感できた人が多かった理由の一つはそれだと思う。

この本に書いてあるのはガンジーという一人の人間の生き方だ。だがその姿は、全ての人間のあるべき姿を表しているように思う。確かに人それぞれ考えは違う。でもその考え方の根底に必要なのは暴力ではなく愛、罪を憎んで人を憎まない心、自分の望みの為に他の欲望を捨てられる強い意志だと思う。何があってもその理念を貫き通したガンジーの強い意志を、僕も見習って生きていきたい。

入選第三位

『銀河鉄道の夜』を読んで

都市システム工学科　三年
浦竹美優紀

「銀河鉄道の夜」。これは宮沢賢治の代表作であり、誰もが一度、耳にした事のある名だろう。それは私にとっても同じ事で、私の中では、夜空を列車が優雅に走っていく…そんな楽しいイメージしかなかった。というのも、「注文の多い料理店」など、昔、子供の頃に読んだ話のイメージが、私の中に「宮沢

賢治の作品」として、今もまだ残っていたからである。

　このようなイメージを持って、私は本を読み進めていたが、読み終えた時に感じた事は「楽しい」というよりも、「美しく、どこか哀しい」…であった。「美しい」のはもう、誰が見ても文句のない事だと思う。銀河を駆ける列車の中からジョバンニが見た色とりどりの光景は、どれもきらきらと輝いて、私の頭に浮かんできた。…しかし、そのどれもがやはり「哀しい」のである。最後まで読み進めなければわからなかった所々にあるカムパネルラの言葉も、もう一度読むととても哀しい文章だった。この鉄道は死者を天国へ送り届けるものだったのだ。ジョバンニがこの列車に乗れたのは、心の強くきれいなジョバンニの為に、神様が道標を見せてくれたのではないかと、私は思う。ジョバンニは本当に心の優しい子である。話の中でも、「この人の本当の幸いになるなら…」「みんなの幸いの為ならば…」と、自分の事よりも他人の幸せを願っている。カムパネルラがいってしまった後にも、「さあもうきっと僕は僕のために、僕のおっかさんのために、カムパネルラのために、みんなのために、ほんとうのほんとうの幸福をさがすぞ。」…と決意を新たにしている。その後『セロのような声』の人が言った「さあ切符をしっかり持っておいで。おまえはもう夢の鉄道の中でなしに、ほんとうの世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたった一つのほんとうのその切符を決しておまえはなくしてはいけない。」…という言葉にも私は胸が熱くなった。この『セロのような声』の人は、カムパネルラのお父さんの「ブルカニロ博士」であると思う。この人の存在はジョバンニにとってとても大きなものだと感じた。そして大きく成長したジョバンニを見ると、私も心の中が大きく、暖かくなれた。これはきっと、この作品の中で私が、いろんな『きれいなもの』を見られたからではないかと思う。

佳作

『イラクの小さな橋を渡って』を読んで

電気電子工学科　一年
朝来貴宏

　まずこの本を手に取って、パラパラとめくってみると、一番に子ども達のあどけない顔、はにかむ笑顔が目に飛び込んできました。そして、僕たちとかわらない普通に生活している人々の姿が目に飛び込んできました。

　作者がこの本で訴えたいことは「もしも戦争になった時に、どういう人々の上に爆弾が降るのか、そこが知りたかった。」と書いてあります。僕もそのことを考えると、恐ろしく怖いものがあります。それは僕もこの写真の人々と同じように、普通に生活しているからです。イラクの人々、特にお年寄りや子ども達は戦争と常にとなり合わせにいるという恐怖を常にもって生活しているんだろうか。遠くない将来に今の生活が壊されるかもしれないという危機感を持っているのだろうか。僕はこの日本に住んでいて、そんな事はいっさい思ったことはないです。

　本の中で、遺跡を修復している石工のことを書いてあります。「彼の目には目前の戦争は映っていない。見えているのは十年後百年後のこの遺跡の姿ばかりだ。」とあり、又、「世界には着々と戦争の準備をする国がある一方で、黙々と遺跡を修復する国もある。」という文があり、僕はとても複雑な思いがわいてきます。なぜならば、遺跡を修復する石工の頭の上に、爆弾が落ちる可能性が高いからです。とても悲しいことです。なぜ戦争が起こるのか、人は人をなぜ平気で殺すことができるのだろうか。

　作者は、あとがきの中で「まだ戦争は回避できるとぼくは思っている。」と、力強くしめくくっています。でもその願いもむなしく、イラク戦争ははじまってしまいました。作者が知っている国に爆弾が降り、人々は死んでゆく。作者は相当な衝撃、脱力感だったと書いています。戦争は正しい事ではありません。

世界中で反対する動きはさかんです。誰もみな戦争が正しいなんて思ってはいません。僕たちは小学校の頃から、平和教育をしてきました。そして日本の悲しい過去を学んできました。戦争を知らない僕たちが戦争を知っているお年寄りから戦争の恐ろしさ、怖さを教えてもらい少しでも実感したことはとても大切です。でも、今現在でも、この世界のどこかで戦争がおこなわれています。

僕はこの本にめぐりあえて、よかったです。今まで読んだ本の中で、この本が一番心に残りました。人間と人間の交流、思いやり、認めあうことの大切さ、そして、他の世界のことを知って自分で考えていくよい機会になったと思います。

佳作

『亡国のイージス』を読んで

電気電子工学科　一年
河村　貴裕

この小説の内容は、十分起こりうることだと思います。特にダイスなる秘密組織は実際にあっても全く不思議でないほど、現実味を帯びていると思います。その中でいくつか私が言いたいことがあります。それは、日本人の国防に対しての意識の低さです。

現代の日本人は、自衛隊の必要性をあまりに誤解しているとしか言いようがありません。北朝鮮のミサイル発射実験、そして中国も近年ではかなり軍備に関して金を費やしています。つまり、いつ日本が攻撃されてもおかしくない状態にあるということです。にも関わらず、軍備に金をかけるとなると、その理由もわからず、ただひたすら、

「好戦的だ。」

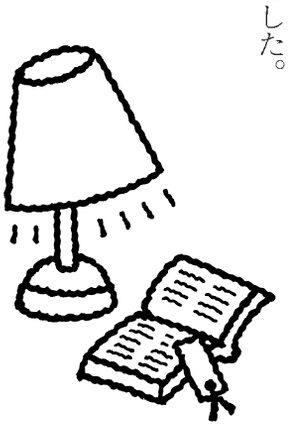
と叫ぶだけです。それは、高校の卒業式で君が代を歌うかどうかということを議論しているのと同じくらいレベルが低いことだと思います。本文の中でも書いてあったように、

「自分の国体も満足に認識できない者たちが、いっぱしに外交を気取るなどとは笑止です」

という考え方に私は賛成です。作品中「亡国の楯」という論文にあったように、現代の私たち日本人は、いったい何に誇りを持ち外国と渡り合って行くかということがあまりにも不明解です。戦後六十年、アメリカの傘下のもとで過ごしてきた日本という国は、経済発展のスローガンの下、民主主義国では第二位の経済大国となりました。しかし、それはその他のすべてのことを置きざりにしてしまったのではないのでしょうか。特に国を愛する心、誇る心、いわゆる愛国心という面で、今からでも遅くないと思います。今一度国を愛する心、誇る心を国民全体が持つべきだと思います。

そして、この本でもう一つ感じたことは、如月行のような悲しい人はたくさんいるのではないかということです。金持ちの祖父、その金で溺れてしまった父、そして父が医師らと手を組み祖父を毒殺。その仕返しに行は父を殺害してしまうという悲しい過去。これは、小説の中だけの話ではないと思います。金持ちの親を持つたいがいの子供は、その金を悪用してしまいます。そして、金に溺れた親の子供は行のように駄目な人間になってしまう場合が多いと思います。そういう子供が一人でも少なくなってほしいと思うし、金持ちの人ほど社会に貢献してほしいなと私は思います。金持ちになることが人間の本当の幸せなのでしょうか。私はそう思いません。やはり、自分の生き甲斐をしっかり見つけて、悔いなく一生を生きることが人間の本当の幸せだと思います。

今の世の中は、いろいろな問題を抱えていますが、しっかり問題を解決して住みよい世の中にしていきたいなと思います。そして何より、日本人としての誇りを持って世界の人々と仲良くなって、立派な国際人になりたいと思いました。



佳作

『解夏』を読んで

電気電子工学科　一年
藤下広夢

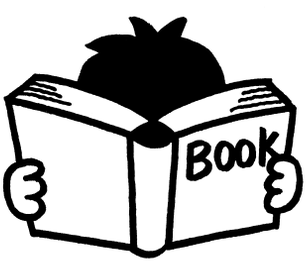
僕は夏休み中に『解夏』という本を読みました。この話は映画化されたこともあるとても感動する話です。

主人公の隆之は東京で小学校の先生をしています。ある日、目に痛みを感じ幼なじみの眼科医に診察してもらいます。そこで隆之はベーチェット病と告知されます。ベーチェット病とは、失明するまでは治らない病気で、治療法がみつかっていない奇病です。隆之は婚約者の陽子に別れを告げ、実家のある長崎に戻り、母の聡子と暮らす事にします。しかし、陽子は隆之の目になると言い、長崎でいっしょに暮らす事になります。そして隆之は失明してしまいます。

この話のタイトルにもなっている「解夏」というのは、古い禅宗の書物の中に出てくる言葉です。禅宗では陰暦四月十六日を「結夏」と言い、その日から陰暦七月十五日の「解夏」の日まで禅宗の僧たちが「庵」というところに集まって座禅をし続けていたという話を近くにある寺の住職から隆之たちは聞きます。そして隆之が失明する時が隆之にとっての「解夏」ということを住職に言われます。

この本の帯に書いてある言葉で、「あなたが、失明するとしたら最後に見たいものは何ですか」という文に僕はすごく考えさせられました。僕が失明するとしたら最後に見たいものはなにか。この問いは、自分にとってどんなものが一番大切か、それは、自分以外の物で、人によって様々だと思います。主人公の隆之が最後に見た景色は、長崎の景色でした。僕ならば、最後に見たいものは、地元の町の風景か、家族、友達だろうと思います。もし失明してしまったら、最後に見たものが一生心の中に焼きつくと思うので、やはり一番大切なものを見たいです。

僕は、この本を読んで、自分を大切に思ってくれている人がいるという事はとてもいい事だな、と思いました。これからは、自分も自分の周りにいる人も大切にしながら、生きていきたいと思います。



佳作

『ガンに生かされて』を読んで

制御情報工学科　一年
山口友翔

僕はこの本の表紙に写っている人物（ガンで亡くなった主人公、飯島夏樹さん）が、とてもすばらしい笑顔で写っていた事にすごく興味を持ちこの本を選びました。

「がんで亡くなった人が、どうしてこんな笑顔で、晴れたような姿になることができるのだろう。」

と思っていました。そして、この本を読んで出した答えは、家族との信頼と夫（飯島夏樹さん）の病気に対しての前向きさ、逆境をはねのけ、自分の力とする姿こそがあの笑顔のうらにはあるのだと思いました。どこかで家族はふっきれていました。夫がもし病気に対して心が負けて、「ああ、もう駄目だ。」と思い、口に出してしまえば、家族のムードも下がり病気の進行も早まっていたと思います。ですが、ガンを宣告されてからの数日間は確かに不安でしかたがなかったのですが、妻の言動や笑顔、子どもの行動にも助けられながら、すぐに気持ちを切りかえて今自分ができることを考え出しました。

本人も、妻や子ども達も
「もう、命は長くはないだろう。」
と心のどこかで思っていたと思います。妻の夫が亡くなるイメージとしては、天国逝きのチケットをもらって、
「それじゃ、逝ってくるね。」
と言ってから、ゆっくりと天国へ行くという感じだったのですが、夫の場合は何も言わずに逝ってしまうのではないかという不安があったので治療の際、
「天国に行く時は私に言ってね。」
と毎回言っていた。が、やはり夫は突然病状が急変して亡くなってしまった。妻や子ども達の気持ちには少し、もう少し生きてほしかったなぁという思いがあったかもしれない。だけど妻と子ども達で夫のいない部屋を見て、
「寂しいねぇ～。」
と妻が一言。そして
「ねぇねぇ、パパは良いなぁ～、天国行って。」
と子ども達が言った。まるで天国が良い所だと知っているかのように。
　この本を読んで、人が亡くなってもその過程を一生懸命頑張っていれば、悔いはないものなのかなと思いました。それと同じようにこれからのひとつひとつの物事を一生懸命取り組んでいこうと決心しました。

佳作

『最後の言葉』を読んで

都市システム工学科　一年
佐藤未都

　私がこの本を読んで感じたことは、「夢を追い続けることの大切さ」でした。
　私はこの本の主人公、そして著者である「川嶋あい」という歌手がとても好きです。この人の歌はとても心に響いてきます。しかし、感動的な歌のうらにはとても悲しく、優しく厳しいエピソードが隠されています。それがこの本の内容です。
　施設で育った日々、新しい家族との出会い、突然の父親との別れ、私だったらあんなに厳しい現実を受け入れることができるのだろうか。やはり私は受け入れられないと思います。
「歌手」になる夢を追い続ける日々。どんなにつらい日々か私には想像もつきません。何度もあきらめたくなった「あい」を支えたのは、他の誰でもない「お母さん」でした。私は、こんなにお互いのことを想い合える親子はそういないと思います。血がつながっていなくてもそれでも親子の絆がつくられる。なんだか、今の世の中の忘れていたものがそこにあるような気がします。
　母との約束「路上千回ライブ」。どんなに大変なことか…。そして、夢がかないかけた時の母親との別れ。絶望への瞬間。それを救ったのが他でもない「三つ目の家族」。私はたとえ他人であっても、家族の絆はつくれるのだと思いました。
　川嶋あいの歌で私がとても好きなフレーズがあります。それは、
「人と人が巡り会うことって奇跡なんだよね。だってこの長い道のり、自分だけじゃ歩けない。」
というフレーズです。人は一人で生きているわけじゃない。一人で生きていくことはできない。私も本当にそうだなあと思います。
「夢を追いつづけることの大切さ。」それは生きる希望そのものだと思います。どんな小さな夢でもたくさんあつまれば、大きな希望となる。この本は、こう言っているような気がするのです。人生は楽しいことばかりではない。つらいこともある。でも、それでも生き抜いてみせる。人と人が巡り合い、できてゆく絆の和。私も、たくさんの絆をつくっていきたいと思いました。
「君をいつまでも守っていきたい
　ぶつかっても傷ついても
　君と僕は夢をもつのさ
　時の流れさからうように
　精一杯の勇気だせるよ
　涙ふいた君と僕なら…」
ページの途中にのっている、みんなの絆や

夢が感じられるスタッフからのメッセージが好きです。
私も、これから夢を持って歩みだしたい。私だけの人生だから。

佳作

『地獄変』を読んで

電気電子工学科　三年
藤津直紀

今回、芥川龍之介の『地獄変』という作品を読んでみた。何故この作品を選んだのかというと、龍之介の作品は面白いと思ったからである。

物語はまず、重要人物である堀川の大殿様の紹介から始まる。語り手は大殿様に仕えていた「私」。この大殿様が、ある画師に地獄変の屏風を描くように命じる。その画師は名を良秀といい、高名な絵師である。彼は気味が悪く、悪口を言う者は絶えなかった。彼の一人娘は小女房として、大殿様の御邸で暮らしている。良秀は絵を描くためならどんなことでもする。そのことが今回の物語に大きく影響している。

さて、この良秀についてだが、確かに並の人間とは何かが異なっている。絵を描くことだけしか頭にないのか、他の絵師には描けない物を追い求めているのかは定かではない。しかしながらその行動には信じ難いものが多く、もう少し周りにも目を向けるべきであったと思う。

例えば良秀は、自分の弟子たちを何度も危険な目にあわせている。そこまでして絵を描きたいのだろうか。良秀にとっては人の命でさえも、絵を描くための『素材』に過ぎないのだろうか。

そんな良秀にも人間らしさは残っていた。それは、一人娘を存分に可愛いがることである。娘のためなら何でもしてあげる、所謂親馬鹿であった。そんな心を持っている彼が、何をしてでも絵を描きたい、というのには何か深い理由があるようにも思える。

結局、彼は、地獄変を完成させるために、娘を焼死させることになってしまった。そこまでして描かねばならなかったのだろうか。他に妥協案等はなかったのだろうか。確かに焼死させたのは良秀ではなく、大殿様の陰謀であるが、せめて絵を諦めて娘を助けることはできたであろう。

自分の目的を達するために、何かを見失ってはいないだろうか。この作品を読んで、そう考えさせられた。良秀は優秀な絵師である。しかし彼は、高みを求めて大切な物を見失ってしまったのだろう。描くことだけが全てになり、人付き合いや周囲の目などはどうでもよくなってしまったのだろう。果たして自分もそうなっていないだろうか。もう一度じっくりと見直してみたい。

良秀は娘を失った為に自殺してしまう。結局最後は自分の首を自分で絞めてしまったようなものだ。そうならないためにも常に、何か見失っていることはないか、本当に大切な物はなにか、よく考えながら生きていきたい。

佳作

『アルジャーノンに花束を』を読んで

都市システム工学科　三年
首藤法子

世間一般で天才とは何だろう、勉強ができ学歴のある人の事だろうか。逆にバカとは何だろう、勉強ができなくて学歴のない人の事だろうか。私はそうではないと思う。天才とは持って生まれた才能プラス努力を重ねた人の事だと思う。バカとは努力も何も重ねず自分を大切にできない人の事だと思う。

チャーリーは生まれつき脳に障害を持っていたが手術により高い知能を手に入れる。それは幸せな事だったのだろうか。高い知能を手に入れる事により彼は憎しみ、悲しみ、人を見下すといった感情をも手に入れる事に

なってしまう。人間は評判や地位に気を使いすぎて自分の身体、心を大切にしようとしない。まさに知能を手に入れた彼はその状態に落ち入っていたのではないだろうか。手術をする前は純粋に知る事を欲していたのに知能を手に入れてからの彼はその努力を怠った。手術前後の彼は一体どちらが天才でどちらがバカだったのだろうか。人によってとらえ方は違うが私は以前の彼はとても素敵だと思う。知るという事を楽しみ学ぶという事への努力を怠らなかった彼が。皆を愛し、自分を愛し、そして自分が愛されていると思っていた彼が。人に笑われて、バカにされる彼は愚かだっただろうか。私にはそんな彼がとても愛しく思えた。他人を愛し、自分を愛せる人は、とても素敵な人だと私は思う。他人は愛せるが自分自身の事は愛せないという人がいる。それはおかしいと思う。自分自身をおろそかにしてその他の物、例えばわかりやすい例でいえば金銭だが上手く使えるわけがないからである。

　そしてこの本の見どころは手術後の彼にもあると思う。彼は高い知能を手に入れたが故に自分らしさを見失い、すべてを難しく考えてしまう。自分とは何だろうか。他人は自分の事をどう思っているのだろうか。そんな事を考える彼にとても人間らしさを感じた。手術前にはない彼の一面だった。それは決して否定するべきものではないと思う。誰もが持っている感情なのだと思う。物事を楽しく皆を愛して生きるのが以前の彼。物事を難しく考え人におびえながら生きるのが今の彼。きっと以前と以後、両方で「チャーリー」だったのだと私は思う。良いところもあれば悪いところもある、それが人間だと思うからだ。どちらかの彼を否定することは人間全般を否定する事になるだろう。非を認める事ができる人は自分という存在も認める事ができる人間ではないだろうか。彼は自分という存在を認める事を教えてくれたと思う。そんな彼はとても人間味があり、決してバカではなく天才だったのではないだろうか。私はそう思う。

編集後記

学生図書委員長
（電気電子工学科　五年）
松下容子

早いものです。わたしはもう五年生になってしまいました。ついこの間中学を卒業したような気分です。春休みが終わるともう社会人になってしまいます。

思えば学生時代、だらだらとゲームをやったり、漫画を読んだり、カラオケに行ったりして、遊んでばかりいました。後悔しています。もっと学生時代を本ばかり読んですごせばよかった。「どんな本が好き？」と聞かれて、本をたくさん読んでいるはずなのに、推理小説とファンタジーとラブコメしか読んでいなかった。せめて残りの学生ライフを使って、「やっぱりオセローは最高だよね」みたいなカッコイイことを言えるよう、シェイクスピアくらいは読んでおこうと思います。

私は今年、図書委員長をやらせていただきました。初めての図書委員長です。

去年は副委員長でした。一昨年は副委員長でした。その前もその前もその前も副委員長でした。……なんと一年生のころから副委員長だったのです。普通の図書委員の経験がありません。入学して一ヶ月で委員会の副につくって一体。つかせる方もつかせる方ですが、立候補する方もする方です。おそらく新入生の中でもっとも早く図書館の司書さんたちに覚えられた学生だったことでしょう。

さて、五年連続図書委員会の上に立ってきた私にとって、読書感想文コンクールの審査は毎年恒例の行事でした。

毎年やっていると、絶対にこの本の作品が入賞するとか、入賞しやすい傾向の作品といったちょっと変わった視点から読書感想文を読めるのが面白かったです。他には上手い字と読みやすい字はちょっと違うということがわかったり（行書体はやめて……！）。

毎年の審査は正直、面倒くさいなと思うことも多かったです。ですが、私だったら気づかないような登場人物の思いや、私とはまったく違う考え方を見るのはとても刺激的で、やっていてよかったと思うことも、面倒くさい事と同じくらい、いやそれよりもずっと多くありました。

みなさんの書かれた読書感想文で、少なくとも私、松下容子は五年間の楽しみをいただきました。夏休みの楽しい時間を削って書いた作品は無駄ではありません。本当にありがとうございました。

読書感想文コンクールの審査とはほとんど関係のない話が大半を占めてしまいましたが、これで編集後記を終わらせていただきたいと思います。

誰か面白い推理小説を教えてください（シェイクスピアは？）。

「もさく　第三十四号」

発行日　平成十九年一月二十一日

発行者　大分市牧一六六六番地
大分工業高等専門学校
学生図書委員会
教員図書部会

印刷所　三和印刷出版株式会社

住　所　大分市高江西一丁目四三三番地二二

電　話　〇九七―五九六―七七〇〇